

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マイノリティの歴史学：オリエンタリズム,
ジェンダー, ポスト・コロニアリズム

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008539

3 マイノリティの歴史学

—オリエンタリズム, ジェンダー,
ポスト・コロニアリズム

森 明子

はじめに

ベルリンで一九七〇年代に出版されたトルコの写真集がある。農村風景や都市の下町、モスクの場面などをとらえた写真に、私は好感をもった。写真集は、出版当時、高い評価を受けたという。しかし、友人の評価はまったく別だった。写真集がとりあげているモチーフは偏っている、この写真集から、ドイツ人読者は「遅れた、前近代的な、貧しいトルコ」のイメージをつくりあげ、再生産する、それは誤った像であるというのだ。彼は、イスタンブール出身で八〇年代初頭からベルリンに住んでいる写真家である。

私は友人のいうことは事実だと思ったが、彼の苛立ちを身近なものとして共感したわけではなかった。写真という媒体の性質上、ある局面が選ばれるのは仕方がない。ドイツ人が、トルコの都市風景よりも農村風景に魅力を見出すのも無理からぬことだ。少なくとも写真は、好意的にトルコやトルコの人々をとらえている。こういう写真集が存在してもいいのではないか。

友人とこんな会話をしたのは二〇〇二年だったと思う。その数年後、ベルリンで催された日本人写真家の個展で、私は説明のできない居心地の悪さを味わった。京都の町を写した数百の作品が、会場の壁面を埋めていた。路地

で遊ぶ子供や野良猫、談笑する老人の表情をとらえた作品の一点一点は魅力的だった。しかしそれが集結した会場は、「古きよき日本、京都」のイメージを大合唱していて、私には逃げ道がなかった。会場を訪れたドイツ人が、一様に写真展を絶賛していることが、私の気持ちをいっそう減入らせた。このドイツ人たちが、「日本文化」に期待しているものを、写真展は提供していた。日本には別の顔もあるよ、と声を発したかったが、その機会はなかった。私の意見を、知り合いのドイツ人たちは鄭重に聞き流した。

このときの私の苛立ちには、トルコの写真集に対して友人が抱いた感情に通じている。いま振り返ってみると、彼は、あの写真集に対してというより、ドイツ社会がそれをどのように迎えたかということに、苛立っていたことがわかる。問題になっていることは、文化の表象をめぐって、どの要素を選び出すか、それをどのように配置するかを、西欧が行っていて、文化の当事者である者がそれに口をはさめないという状況である。西欧の好むトルコや日本が、一方的に生産／再生産されていくのを黙ってみているほかない。そのときに当事者が感じる苛立ちや戸惑い、そして抗議は黙殺される。

もっとも、この過程はそれほど単純に進行するわけではない。京都の写真展の展示方法は、写真家本人の希望によるものだったと聞く。だとするなら、これを西欧による一方的な文化の表象ということには留保が必要だろう。この写真家の演出は、意図したかどうかはともかく、ドイツ人の好む日本イメージを拡大再生産したわけで、ここには両者の協力関係が成立している。同時に、そこで表象されそなったものも生みだされているわけである。

ある文化をどのように表象するかということには、それがどのように消費されるのかを含めて考えるなら、さまざまな立場の存在を封じ込めることが含意される。表象されそなった事実を「仕方ない」で済ますことは、いつまで許されるのか。マイノリティの歴史学を動機づけているのは、この問題意識である。

以下に続く第一節では、マイノリティの歴史学の問題意識が、どのような文脈に配置されるのか、その背景につい

て述べる。これによって、議論のおよその輪郭をとらえようとする。第二節では、マイノリティの歴史学の実践において、どのような問題が提起されているのか、二、三のポイントに即して述べていくことにしよう。最後に、このようなマイノリティの歴史学がどこに向かおうとしているのか考える。

一 マイノリティの歴史学の輪郭

1 視角

マイノリティの歴史学として、ここでは三つのキーワードが与えられている。これらのキーワードについて、かんとんに述べておこう。

第一に、ここでオリエンタリズムとは、エドワード・サイードが一九七九年に出版した『オリエンタリズム』以来、さまざまな分野に大きな影響を与えて展開した一連の議論をさしている。オリエンタリズムをひとことというならば、西洋による東洋の本質主義的な表現(Carter 1992)となる。冒頭に紹介した私の友人の苛立ちも、このオリエンタリズムの例として説明することができる。

オリエンタリズムが提示した批判は、多方面に展開していくものであるが、ここでは、他者を表象することが孕む問題として把握しておきたい。表象する側(西洋)に権威があたえられていて、その言説空間に、表象される側(東洋)から接近する道が開かれていない。このような傾斜した配置が、西洋と東洋のあいだの境界をつくりあげてきた。

こう考えると、西洋と東洋という対立は、言説の生産を介して恣意的に構築されてきたことが見えてくる。ジェイムズ・クリフォードは、西洋が手にしているこの権威を「父性的温情主義を帯びた諸々の特権」と呼んで、その意味するところを次のように説明している。「これらの書き手は、語ることにないひとつの東洋」のために語る」かと思

うと、衰退したり解体してしまった「真理」を再構成し、また、東洋の真正さが消失してゆくことを嘆くかと思うと、たんなるネイティブの知りうる以上のことを知っている、というわけなのだ(クリフォード 2003、三二五頁)。

第二に、ジェンダーという語については、ジョン・W・スコットが一九八八年の著書で与えた定義をとりあげよう。「ジェンダーとは、性差に関する知を意味している。私は知という言葉、ミシェル・フーコーにならって、さまざまな文化や社会が人間と人間の関係について……生み出す理解という意味で用いている」(スコット 1992、一六頁)。マイノリティの歴史学としてのジェンダーは、女性と男性の不平等というような素朴な女性論にとどまるものではないことを確認しておこう。それは人種や民族、階級などのために歴史から置き去りにされてきた他のマイノリティにも関心をもち、複数のヒエラルキー関係の重層など、より複雑な権力関係を問題にする。

第三のポストコロニアリズムは、特定しにくいことばである。まず、この語は、歴史的な時代性に規定されている。一九五〇年以降の植民地的権力の解体と再配分、それが反響した一九六〇年代から一九七〇年代にかけてのラディカルな文化理論と連動するものであるというクリフォードの時代認識を、まずあげておこう(クリフォード 2003、三六頁)。この状況において、かつての植民地の人々が、文化について語る権利を自ら主張したり、研究者が生産した表象群の抑圧的な作用を批判したりする運動を、ポストコロニアリズムとして理解することができる(太田 1996、一一六頁)。

さらに、第三世界出身の知識人が第一世界で展開している批判的な言語活動も、ポストコロニアリズムとして理解される。たとえばガヤトリ・C・スピヴァクが、ネオコロニアリズムやグローバルバリエーションに対する知識人のありようを批判的に論じることなどがこれにあたる(スピヴァク 2003)。こうした運動を、誰が、どこで、どのように展開するのかということは、きわめて多様である。

さて、これら三つのキーワードが導く議論は、重なり合い、不可分にからみ合う。これらの議論の全体にめぐりばりをきかせて、まとまりよく論じようとしてみても、あまり生産的ではないだろう。それは、現代の人間科学、社会科学

学、思想の広汎な領域において、さまざまな形でさまざまな方向に展開しつつある議論だからである。私がここでやろうとしていることは、錯綜する議論を回顧し整理するのではなくて、「歴史／物語りの哲学」という視点から、これら三つのキーワードが導く議論をマイノリティの歴史学として考えたときに、何が見えてくるのか、それが現代世界の理解や将来への展望にどのような貢献をなしうるのか、を考えることである。

このことは、私が専門とする文化人類学が、異文化記述をおしてやろうとしていることとも通じる。文化人類学は、ほぼ二〇世紀と重なるその学の歴史のなかで、さまざまな相貌をもってきた。植民地支配のもとで行われた文化人類学の調査研究が、対象をエキゾチックな他者にとらえていたことを否定することはできない。だが、二〇世紀後半にポスト構造主義の思想的影響を受けた文化人類学は、明らかかな問題意識の転換を経験してきた。一九八〇年代後半以降の人類学者の仕事には、オリエンタリズム批判、ポストコロニアル状況への問題関心が、社会に埋め込まれたジェンダーを問題化してとらえる視線とともに明らかに前景化している。この転換は、異文化研究を命題としてきた人類学が、その研究対象を、自らの社会の外部にある「他者」から、われわれと同じ世界に住む「マイノリティ」へと配置しなおす転換であったともいえる。問題は、この過程で何が生まれているのかということである。マイノリティの歴史学という場合のマイノリティの意味は、このような実社会と学問世界における歴史的背景を考慮して理解される。

2 背景

次に、マイノリティの歴史学の社会的・思想的な背景について、およその輪郭を把握し、それが「物語り論」と結びついていることを述べていこう。

野家啓一によれば、歴史哲学の文脈のなかに物語り論が一定の地歩を占めるようになったのは一九六〇年代後半か

ら七〇年代前半にかけてで、「物語り論は、マルクス主義の退潮と構造主義の台頭という時代状況の中に出現した」(野家 2003, 五五頁)。一方、オリエンタリズム批判をはじめとするマイノリティの歴史学をめぐる議論も、前節に引いたクリフォードが述べているように、六〇年代から七〇年代にかけてのラディカルな文化理論を経て生まれている。マイノリティの歴史学という問題構制を理解するために重要な議論として私は、分析理論としてのフランスのポスト構造主義と、その思想を実践的な問題意識から批判的に検討していくフェミニズムの政治学をあげたい。

ポスト構造主義理論において、それにもっとも明示的な影響を与えているのは、ミシェル・フーコーである。スコットの『ジェンダーと歴史学』がフーコーの強い影響のもとにあることは、すでにあげた引用からも明らかだろう。ジャック・デリダの理論も積極的にとりいれようとするスコットは、意味と権力をめぐる政治に注意を向けるポスト構造主義の姿勢を、歴史研究に接木しようとしている。彼女の課題のひとつは、「ジェンダーのような概念が、見せかけの不変性を獲得するやり方」がどのようなものであるのか、歴史資料を通して研究することだという。そのため理論的なよりどころとなるのが、ポスト構造主義である(スコット 1992, 二二頁)。

フーコーの権力理論の影響は、ベドウィンの女性について民族誌を著した文化人類学者のライラ・アブールゴトの研究に、顕著に見られる(Abu-Lughod 1986)。アブールゴトは、一見したところ抵抗とは見えない形で行われている抵抗、システムの転覆や解放のイデオロギーとは結びつきそうもないような、女性たちが日常生活で行っている些細な抵抗の形をつぶさに記述する。彼女のキーワードは抵抗と権力で、抵抗を引き起こす権力を問題にする。そして、フーコーの理論が日常生活に埋め込まれた権力関係を発見し、記述するために有効であること、その権力理論の影響のもとに、抵抗のさまざまな形が関心を呼ぶようになったことを指摘する(Abu-Lughod 1990)。フーコーの影響以前、一九六〇年代や七〇年代の抵抗に関する研究は、農民暴動や革命運動だけをとりあげて、日常生活に埋め込まれた抵

抗には目をむけなかった。それは無意識のうちに、抵抗運動のヒーローにロマンティズムを投影していたためだという。

では民衆史の研究者からフーコーは、どのようにとらえられるのだろうか。フーコーが歴史学に大きな影響を及ぼしていることは疑いない。ここで問題にしたいのは、フーコーをどのように受け入れるかということである。

安丸良夫は、マルクス主義歴史論をよりどころとしていた戦後日本の歴史学が一九七〇年代半ば、歴史意識と問題設定、方法、研究素材などにおいて、決定的な転換を経験したと述べている。この転換に影響を与えたものとして、フランスのアナル派、イギリスの社会運動史研究、文化人類学、そしてフーコーの文化史があげられる。ただし安丸は、フーコーと歴史学者の立場は異なるものとらえていて、次のように述べている。「歴史学が細部に即した具体的な記述をめざすもの」であるのに対して、フーコーの立場は「近代の学問や知の自明的な前提や思い込みへの原理的な批判を提示するところ」にある。「原理的抽象レベルがフーコーの主題であるために、歴史家の関心とは大きく異なった方向で論じられている」と(安丸 2004, 一三四頁)。

フーコーに対して、歴史学者の安丸と人類学者のアブールゴトは一見すると異なる評価をしているように見える。両者のスタンスにいったい違いがあるのか、その点を考えてみよう。「細部に即した具体的な記述をめざす」という問題関心については、安丸もアブールゴトも大きな相違はない。違ふとすれば、安丸が「近代の学問や知の自明的な前提や思い込みへの原理的な批判を提示する」と呼んだものに、どう対処するかである。安丸は、それは歴史家の仕事ではないと考えている。ただし、安丸が戦後の歴史学において、近代化論に対するもっとも先鋭な批判者として、多くの仕事をしてきたことは周知のとおりである。安丸がここで問題にしているフーコーの「原理的な批判」が何を意味しているのかは、慎重に考える必要がある。

一方、フーコーの功績をたたえるアブールゴトが「近代の学問や知の自明的な前提や思い込み」への批判を自らの

重要な仕事であると考えていることは間違いない。それは彼女のほかの仕事に、より明確にあらわれている (Abu-Lughod 1991)。アブールゴトは、マイノリティを対象として記述するだけでなく、マイノリティを問題とすることによって、マジョリティとしての西洋や近代の自明的な前提と思いつみ、そして抑圧に対する批判的立場を明示的に提示している。ここでは「細部に即した具体的な記述」が社会批判と結びついている。このアブールゴトの奉じる批判は、安丸が「原理的な批判」と呼んだものと同じだろうか。

安丸が「原理的批判」や「原理的抽象レベル」という語で何を意図しているのか考えるうえで、安丸とフーコーの近代理解には通じ合うものがあるというタカシ・フジタニの指摘が、問題の核心に近づく手がかりを与えてくれる。フジタニは、六〇年代、七〇年代の日本の民衆史は、古典的なオリエンタリストの偏見を打ち破りながら、なお「発展」と「遅れ」という近代化の論理の内にあつたが、安丸の仕事はそのなかにあつて「近代的主体性のフーコー的理解」を示していたという (フジタニ 1999, 四八四―四八六頁)。それは、「自己形成的・自己鍛錬的な主体が近代の支配の道具でもあつた」ことを、安丸の研究が明らかにしたことをさしている。この局面で、安丸とフーコーの「近代」に対する批判的視線は、たしかに通じ合っている。つまり、安丸のフーコーに対する違和感は、近代理解のあり方に対してではないのだ。

残された問題は、「原理的抽象レベル」での主題化という点に絞り込まれる。それがどのようなものを意味するのかについて明らかにしていったのが、マイノリティの歴史学の実践だった。西洋の主体に関わる議論のなかで、フーコーはマイノリティの歴史学の立場から、きびしく批判されることになるのだが、その内容については後述する(二節3)。ここでは、マイノリティの歴史学が、フーコーをはじめとするフランスのポスト構造主義理論を経由し、ないしは、それとの共有部分をもちながら、議論を深めていったこと、その一方で、問題の主題化においては相違があり、それはそれぞれの担い手のあいだで違和感と認識されるものでもあつたことを押さえておきたい。

次に、フェミニズムの政治学について述べよう。マイノリティの歴史学に重要な影響を与えたフェミニズムの議論は、一九八〇年代に展開した。とくに、女性の経験が一樣でないことを指摘した研究が重要である。白人中産階級のフェミニストが有色人種の女性を代表しようとするとき、そこにいかんともしがたく潜むヒエラルキーや排除・抑圧の構造が明らかにされた。ここからカテゴリーやアイデンティティの政治、ポジショナリティ（位置拘束性）をめぐって、重要な議論が展開している（Ocharny, 2003 [1991]など）。一九八〇年代以降のフェミニズムの政治学は、西洋／東洋、白人／非白人などの二極構造を、排除や抑圧のシステムを支え、それを強化するものとして批判し、その境界にゆさぶりをかけ、境界を描きななおそうとしている。この点で、フェミニズムの政治学はマイノリティの歴史学と通じ合う。

たとえば、問題を複雑で具体的な社会的文脈のなかに配置して、歴史性を追及していく姿勢や、「現存する権力分布に対抗し、変革しようとする集団的試みの一部」（スコット 1992, 二二頁）であろうとする執着は、マイノリティの歴史学がフェミニズムの政治学と共有している傾向である。スコットは、自らの関心をフェミニストたちと共通した政治的なもので、「女と男のあいだに存在する不平等を指摘し、変革すること」だとさえ述べている（スコット 1992, 一八頁）。

社会を変革することまで射程に含めた議論を展開するのであれば、その主張を、誰が、どこから、誰に向けて発するのか、という位置（ポジション）の問題があらたに起こってくる。そのような批判を含んだ記述は、それが配置される議論の文脈に規定されるから、文脈に応じて語り直される、流動的な性格を帯びることにもなる。マイノリティの歴史学が必然的に帯びることになるこれらの性格は、方法論としてとらえた「物語り論」と対応する。そのことを確認しておこう。

物語り論の基本構図として、野家は次のように述べている。「物語りは直接的経験を受容可能かつ理解可能な経験へと組織化するという意味で、経験の可能性の条件をつくっている」。それは「直接的体験を境界条件としてもつ外部にひらかれたネットワーク」としてとらえられるのであって、異他的なものと遭遇すれば、そのたびに再調整が必要とされる(野家 2003, 六二―六四頁)。こう考えることによって、歴史の物語りには、再記述や語り直しが、はじめから条件づけられていることが説明される。同時に、この同じ考えから、歴史を批判的な視点から相対化してとらえることも可能になる。つまり、「現に物語られている歴史の抑圧・隠蔽作用を明るみに出す」(鹿島 2003, 二二頁)視座が、物語り論によって与えられるというのである。このような方法論としての物語り論が、現実社会の不平等関係や矛盾に批判的な問題意識をもつマイノリティの歴史学の議論に適したものであることは、よく理解できることである。

この節では、以上のように、マイノリティの歴史学が、ポスト構造主義の理論と、フェミニズムの政治学と部分的に重なりながら、批判的な物語りを展開していることを見てきた。それでは、こうした物語りの実践は、どのような問題を提起しているのだろうか。

二 マイノリティの歴史学の実践

ここでは、「反一全体性」という問題と、「マイナー」という語をめぐる議論に焦点をあわせて述べていこうと思う。このふたつのキーワードに、すべてではないにしても、マイノリティの歴史学の重要な問題が収斂する、と私は考えている。

1 自己の物語り

以下では、ミニ・ブルース・プラットの「アイデンティティ——肌・血・心」という作品に沿って述べていこう(Pratt 1984)。プラットは、合衆国南部の白人、ミドルクラス、キリスト教徒の家庭に生まれ育った女性である。結婚後レズビアンとしてカムアウトし、離婚してからは、人種主義や反ユダヤ主義に抗議するフェミニズム運動に参加している。

この作品は、「ホーム」をテーマにして、プラット自身の経験をふりかえり、自分がおかれている位置を繰り返しとらえなおしていく物語りとして進行する。彼女は、南部のアラバマから、ノースカロライナ、ワシントンDCへと生活の場所を移していった。アラバマは子供時代と学生時代を過ごした場所で、数世代前からの彼女の家族の歴史と結びつく。ノースカロライナは結婚生活を送り、カムアウトした場所である。ワシントンDCは現在の生活の場所である。プラットは、そのときどきに生活しているコミュニティに親しんでいるが、そこには彼女が親しんでいるのは異なる歴史、白人によるインディアンや黒人の搾取と、被抑圧者の側の闘争の歴史がある。その隠された歴史が掘り起こされて、彼女の経験に並置される。物語りは、地理、住民、建物に焦点をあてて、個人的な経験からホーム、アイデンティティ、コミュニティの相互関係へと展開していく。

作品は以下のことから始まる。

私はワシントンDCの一角に住んでいる。六〇年代の暴動のころ、郊外に住む白人が「ジャングル」と呼んでいたあたりである。私の知る限り、いまもおそらくそう呼ばれている。銀行に寄ったり、靴修理と合鍵の店にブーツを預けたりする、HストリートNEまでの二ブロック半を歩くあいだ、私はいつも視界に入るかぎり唯一の白

人である。ここに移ってきた年、ふたりの白人に会った。ふたりとも女性だった。(車に乗って通り過ぎていく白人は含んでいない。HストリートNEは、Hストリート・コリドアとして知られている。それは自分の家からよそに行く途中、急いで通り過ぎるところを意味する。)

(Pratt 1984, p. 11)

プラットは、ストリートで黒人の声を聞くと、南部のふるさとにいるような気持ちになり、父の南部なまりを思い出して落ち着く。そして間髪をいれず、この話し方が、同時に苦痛をもたらすことを述べる。

アパートの門番のブーン氏は、いつもうつむき加減で、浅黒い肌をしている。サウスキャロライナの、インディアン¹の抵抗や脱走奴隷の武装コミュニティで有名な土地の出身で、その沼地は、かつて大規模な米のプランテーション²があった土地で、奴隷解放の軍事行動が成功した場所でもある。

(Pratt 1984, p. 12)

ワシントンDCの情景は、故郷の家族のなつかしい記憶を呼び起こす。それは同時に、南部の歴史、黒人やインディアン³の闘争の歴史も呼び起こす。こうして作品は展開していく。

この物語りは、マイノリティの歴史学の、いくつかの重要な特徴を示していると私は考えている。著者が自己の位置を問題にすること、その位置がひとつではないこと、さらにそこからたちあがってくる問題が、ストーリーともども、単線的に構成されないで、複数の線が交錯しながら展開すること、などである。また、ホームと自己とのあいだにある裂け目を見つめることで、マイナーの意味を掘り下げていくベクトルがあることにも言及しておこう。この作品については、カレン・カプランがとりあげているし(Kaplan 1987)、それとは別に、ビディー・マーティンとチャンドラ・T・モハンティの論文もある(Mohanty and Martin 2003 [1986])。これらの論文も参考にしながら、プラット

トの物語に沿って、いくつかの論点について述べていく。

2 部分性、反一全体性、異種混淆性

モハンティとマーティンは、プラットの作品について、近年の脱構築的な方法論から見ると、著者とテクストが決裂したり、真正性を主張しているように見えるなど、疑わしいところもあるが、このような物語りこそ、アイデンティティのポリティクスを扱うために必要だと述べている (Mohanty and Martin 2003 [1985], p. 88)。彼女たちが注目するのは、著者の位置を意識し、著者の見解がどこからなされているのかを明確にする書法である。それは、批評者自身が社会で占める立場を否定し、見えなくする「非決定」の反対である。位置の明示は必然的に、その発言が部分的であることを意味する。ある位置からの発言であることを明らかにすることは、別の位置からは別の発言がありうることを認めることであり、また最終決定を主張しないことをも認めるのである。このことはプラットの物語りに特徴的で、彼女は視点をソフトさせながら、繰り返し自分の位置に言及していく。この書法によってプラットは、アイデンティティをある一定の立場に固定して見るのではなく、さまざまな位置から多元的にとらえることに成功している。部分性は、反一全体性の主張につながる。抽象的な議論を展開する批評者は、しばしば二項対立のもとにカテゴリーを固定して、ほんらい多様である他者をひとつのカテゴリーに全体化してとらえる傾向がある。その端的な例がオリエンタリズムで、全体性が他者に押し付けられるときの弊害は、冒頭に見たとおりである。

オリエンタリズム批判は、このような全体性の一方的な押し付けに対して行われる。サイドは、オリエンタリズムが「それぞれの人生の来歴を語ることでできる個別のアラブ人」ではなく、「アラブ人」一般について書いていることを批判した。「そのような一般的な言い方は、ひとりのアラブ人の喜び、悲しみ、圧制を前にした不正義の思い、その他諸々の固有感情的必然的に従属的な地位においてやってしまう」ゆえに、受け入れることはできないのである。

(クリフォード 2003 [1980], 三三二頁)。

反一全体性は、マイノリティの歴史学の諸作品が共有する重要な特徴である。クリフォードは、「サイードの研究の、隠れてはいるがもつとも重要な強調点は、全体性への倦むことなき疑念である」と言い切っている(クリフォード 2003 [1980], 三四五頁)。スコットが二項対立に疑義を呈していることも、同じ問題意識をあらわしている。「固定化された対立は、どちらのカテゴリについてもその異種混濁性を、対立するものとして提示されている用語がどれほど相互に依存しあっているかを——すなわち、それらがなんらかの固有の、もしくは純粋な対立からではなく、内部的に設定された対照から意味を引き出していることを、覆い隠してしまう」(スコット 1992, 二四頁)。

反一全体性、反一二項対立による部分性の主張は、さらに、部分同士が交わることによる異種混濁性への回路をひらく。異種混濁性を認めることは、物語りにおいて、著者の位置が首尾一貫しないこと、物語りのストーリーが流動的になることを、許容するための視座を確保する。サイードが、クレオールやメステイソ文化について述べている部分から引用しよう。「彼らのテクストがこれみよがしに示しているのは、紛れもない不_レ純_レさであり、経験全域にわたる現実と超現実との魅力的な混濁なのである。……濃密にからみあつた諸系列からなる歴史であり、この歴史は、直線的物語とか、あるいは、いとも容易に回収できる「本質」とか、さらには「純粋な」表象の独善的なミメーシスといった観念を、笑い飛ばしてしまうのである」(サイード 2001, 一四四頁)。このような異種混濁性の主張は、とくにポストコロニアリズムの物語り文脈において重要なモーメントをなしている。

3 「マイナー」という考え方

ところで、マイノリティの歴史学というときの「マイナー」とは、どのような概念であり、何を含意するのだろうか。ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリの「マイナー文学」という概念を糸口にして、この問題を考えていこ

う。

ドゥルーズとガタリによる『カフカー——マイナー文学のために』の第三章「マイナー文学」によれば、マイナー文学とは、マイナーの言語による文学ではなく、プラハのユダヤ人がドイツ語で書く場合のように、少数民族が広く使われている言語を用いて創造する文学をさす。端的な例がカフカの文学である。

ドゥルーズとガタリは、マイナー文学の特徴を三点にまとめた。第一に、言語が「脱領域化」の強力な影響を受けること。第二に、個別の問題が直接的に政治に結びつけられること。第三に、言表行為のすべてが集団的価値をもつことである。ここで「脱領域化」とは、以下のように説明される。マイナー文学の作家は、共同性の周辺や、共同性から離れた位置にいるために、彼の書くものは「潜在的な別の共同性を表現し、別の意識の手段、別の感受性の手段を作り出す」(ドゥルーズ／ガタリ 1987、二七一—三二頁)と。

ここでドゥルーズとガタリがあげたマイナー文学の特徴を、「マイノリティの歴史学」に適用してみることは、ある程度まで可能である。プラットの物語りを例にすると、第一の脱領域化の影響は、ホームと自己の裂け目というテーマと結びつく。第二の政治との結びつきについてはいうまでもないだろう。第三の言表行為のすべてが集団的価値をもつことについては、人種、性差、階級などのカテゴリーの問題がこれと関連している。

しかし、ドゥルーズとガタリは、マイナー文学を対象としてとらえることにとどまらずに、この議論をさらに先に進めていった。「マイナー」という形容詞は……すべての文学の革命的な条件の特徴を示すものだと言った方がいいだろう(ドゥルーズ／ガタリ 1987、三二頁)と述べる彼らが求めていったのは、「ひとつのマイナーの文学をどのように作り出すか」という問題である。どのようにして、自分自身の言語の遊牧民・移民・ジプシーになるか(ドゥルーズ／ガタリ 1987、三四頁)。「マイナーになる」という考え方が、ここに姿をあらわしてくる。そしてついには、「マイナーになる」過程が脱領域化と理解され、その過程を旅する象徴的な主体に「ノマド」という名前が与えられることになる。

のである。

ドゥルーズとガタリのこの理論は、ポスト構造主義の理論家たちには、おおむね好意的に迎えられた。だが、カレン・カプランは、「マイナーになる」主体が誰であるのかをめぐって、ドゥルーズとガタリの議論に疑義を呈する。「マイナーになる」ことは、「中心に位置してメジャーつまり有力たる人々にとってのみ意味のある戦略」であり、それが表現しているのは、彼らが「特権化されたアイデンティティや営為を手放すという、ユートピア的な過程のことである」。このような理論活動は、モダニティの周辺や周辺のな位置にいる人々を、比喩を通じて二重に植民地化することであり、つまるところ「近代における中心対周縁の地政学」をなぞることにはかならない(カプラン 2003、一六五頁)。マイノリティの歴史学が、フランスのポスト構造主義理論を批判的に乗り越えていく重要な起点がここにある、と私はとらえている。

カプランが問題にしているのは、「マイナー」という概念をめぐって、マイナーの対極に西洋という主体が、帝国主義的な図式そのままに温存されていることである。しかも始末の悪いことに、その主体は目に見えないように隠蔽されている。マイノリティの歴史学が、ポスト構造主義理論の影響を受けながら、それとは異なる立場を確保しているのは、この点においてである。マイノリティの歴史学は、ポスト構造主義理論に隠れている西洋の主体の存在を明らかにし、それをきびしく批判する。ガヤトリ・スピヴァクやエドワード・サイードの議論も、この文脈に配置される。

スピヴァクは、フーコーとドゥルーズのあいだで行われた「知識人と権力」という対談(フーコー/ドゥルーズ 1973)について、ふたりともイデオロギーの問題をまったく無視していること、彼ら自身が知的ならびに経済的な生産活動の歴史のなかに巻き込まれているということを顧慮していないことを指摘した。問題は、「主体としてのヨーロッパの歴史は西洋の法、経済、イデオロギーによって物語化されたものであるにもかかわらず、この隠蔽された主体はそ

それが「地政学的規定をもたない」と言いつくろう」ことである(スピヴァク 1998, 三頁)。異種混濁性と他者についての、最良のふたりの知識人が見落としている問題としてスピヴァクがあげるのは、第一に、労働の国際分業を無視していること。第二に、「アジア」や「アフリカ」を透明な存在として扱っていること。第三に、社会化された資本という法的主体をふたたび確立していることである。

隠蔽された西洋の主体に対する批判的な視線は、サイドにも共通している。サイドは、フーコーを含む多くの西洋の理論家たちが、帝国主義の問題に無頓着で、それを温存するのに間接的に手をかしてきたと指摘する。「フーコーはというと、みずからの理論をとりまく帝国というコンテクストを無視して、植民地化の運動を不可避なものとして実際に表象しているかのようにみえる。逆説的なことに、フーコーにとって不可避の植民地化の運動は、孤独な個人としての学者と、彼をとりまくシステム双方の威信を強化してくれるのだ」(サイド 2001, 一四七頁)。姿を隠しながらしっかりと温存されているこの西洋の主体が、普遍主義と呼ばれているのである。

ここで、安丸がフーコーに対して抱いた違和感を想起しよう。「原理的抽象レベル」での主題化と安丸が表現したものは、見方をかえれば、西洋の主体を隠蔽し温存したままに行われる近代批判であったのではないか。そして、マイノリティの歴史学は、この西洋の隠蔽された主体を克服する批判的な実践として位置づけられる、というのが私の考えである。

これまで述べてきたマイノリティの物語りには、「日常の生きられた抑圧経験に由来する抵抗意識」、「普遍理論の特典を拒否する」姿勢、マイナーであることを「理解の様式として、アイデンティティの裂け目を見つめ、全体性の継ぎ目をほぐすこと」(Kaplan 1987, pp. 191-194)という特徴をあげることができるだろう。それはプラットの作品のように、自伝的な物語りにおいて顕著にあらわれる。だが、マイノリティの歴史学という場合には、特定の人々にとって主体的な意味をもつ、集団の物語りについても考える必要があるだろう。オリエンタリズムやポスト・コロニアリ

ズムという現代世界の問題構制のなかで、集団の物語りとしてのマイノリティの歴史学は、いかに実践されるだろうか。次に、この問題について考えていこう。

4 集団の物語り

物語りを、直接的経験を受容可能かつ理解可能な経験へと組織化する行為と考えるならば、物語り実践の過程には「経験した者」「語る者」「聞く者」「聞いた話を伝える者」など複数の役割が発生すると考えられる。自伝的作品の場合には「経験した者」と「語る者」が同一人物であるが、それが異なる場合は多にありうる。そのとき語る者が誰であるのか、その者に語る資格はあるのか、どのような位置から語るのか、などの難問が頭をもたげてくる。スピヴァクが「サバルタン」という語を用いて糾弾した、表象／代表性をめぐる問題群である（スピヴァク 1988）。同様の問題は、物語実践に関与する複数の役割のそれぞれについて考えられる。

問題は、本質主義にからめとられることなく、また、代表性を僭称することなく、マイナーな集団の歴史を物語る道筋をいかに確保できるか、ということである。スピヴァクは自ら「戦略的本質主義」ということばをつくり出して、マイノリティの文化表象をめぐる閉塞状況を、緊急避難的に突破しようとした。それでも「サバルタンは語れない」ことに変わりはない。集団の物語りとしてのマイノリティの歴史学を位置づけようとするなら、これとは異なる道筋を見つけ出す必要がある。そのようなひとつの道筋を示したものとして、私はここで、文化人類学者の春日直樹の歴史／物語りの実践をとりあげようと思う。

春日は、フィジーのヴィチ・カンバニ運動について記述した（春日 2001）。ヴィチ・カンバニ運動とは、英領植民地時代の一九一〇年代に出現した、フィジー人によるフィジー人のための会社設立を目標とした運動である。フィジー人の多くを熱狂させて全土を席捲し、植民地政府からきびしい弾圧を受けたが、執拗に生き残り、フィジーが独立し

た今日も、過去・現在・未来を語る記憶として想起される。春日の研究は、この運動の中心人物だったアポロシという人物を主人公とする物語りとして展開する。

物語りは、アポロシの経験を春日が跡づけていく、という構図をとる。運動が実際にどのように展開したかについては、綿密な資料収集と分析にもとづいて、「細部に即した具体的な記述」(安丸 2006)がこれを明らかにしていく。では「直接的な経験を受容可能かつ理解可能な経験へと組織化する」(野家 2003)物語り化の道筋は、いかに確保されるのだろうか。

アポロシは「文化のさまざまな語りや規範のせめぎ合いをその身体に集めて問題化する」(英雄的個人)として、物語りの焦点にすえられる(春日 2001, 三二頁)。英雄的個人とは、「社会の諸矛盾や内部的な諸対立や、さらに生活形態の危機に対する抵抗の諸形態を形象化する」(典型人物)である。アポロシが示しているのは、「サーリンズの英雄のように宇宙の組織者の地位に安穩とするわけにはいかず、社会の諸勢力の葛藤を一身に担って民衆の願望を引き出し、社会に構造的な変化を起こしていく」人間の姿である(春日 2001, 四四頁)。

ここで春日が描こうとしているのは、あくまでフィジーの文化であり人々である。アポロシの物語りの文脈のなかに配置されることによって、それに光があてられる。その手続きのために春日が注目したのが、(英雄的個人) (典型人物)、さらに(可能な意識の最大値)などの概念である。「彼(アポロシ)自身は、諸勢力の意識の限界から決して解放されないままに、むしろ意識の限界を一身に背負ってぎりぎりまでこれを探求するなかで、リュシアン・ゴルドマンのいう(可能な意識の最大値)へと接近したのである。この接近によって彼は、文化の再組織化をめぐる可能性と限界を提示する。そしてその同じ接近は、現在の世界を破り出ようとするアポロシと支持者たちの姿を、生き活きと現前させる」(春日 2001, 四六頁)。

この物語りを「語る者」がどこに位置しているのかを考えてみよう。語る者(物語り作者)とは春日である。この物

語り作者は、植民地政府の文書からフィジーの村まで、思いつくあらゆる種類の資料と情報を渉猟して、アポロシの歴史／物語りを記述する。それと同時に、人々によるアポロシの物語りを聞き取り、それを自らのつむぐ物語りに組み込んでいく。ここで注目したいのは後者の内容である。重要なのは、できごとの詳細な情報よりも、フィジー人がアポロシのことばや物語りをどのように受けとめているのか、ということである。たとえば人々が引用しあうアポロシのことばの解釈が、「アポロシと彼の運動についての長い物語をたえず抛り所にして具体の裏づけをとりながら、至上の真実を解き明かす矜持と興奮を人々に与え続けていく」(春日 2001, 三八八頁)ことに、この物語り作者は注意を向けている。マイノリティの歴史学における細部に即した具体的な記述が生かされるのは、この局面においてであり、集団の物語りとしてのマイノリティの歴史学は、この位置において構成される。

マイノリティの歴史学のひとつの形がここに示されている、と私は考える。それは英雄的個人についての物語りであるが、アブリルゴトが批判の対象にしたような、ヒーローイズムに乗じた物語と異なることはいうまでもない。ポスト・コロニアリズムの問題意識に基礎づけられ、現代世界の現実告発という批判的な姿勢をともなった、歴史／物語りの実践である。

結びに代えて

最後に、マイノリティの歴史学が、どこに向かおうとしているのか考えて、結びに代えよう。

物語りのはたらきは、社会的に優勢な支配の側からなされる場合もあるが、その逆に、支配に抵抗する側から行われる場合もある。マイノリティの歴史学として本稿でとりあげたのは、後者の物語りのあり方である。それは、オリエンタリズムやポスト・コロニアリズムをめぐる批判的議論の実践のひとつとして配置される。サイドの次のこと

ばは、物語りのこのあり方を端的に示している。「物語こそ、わたしの議論のななめであり、わたしの基本的な観点とは、探検家や小説家が世界の未知な領域について語ることの核心には、物語がひそむこと、また物語は、植民地化された人びとが、みずからのアイデンティティとみずからの歴史の存在を主張するときを使う手段ともなるということである」(サイドド 1998, 三頁)。

では、マイノリティの歴史学は、大きな物語りに対するオルターナティブな物語りを紡ぎながら、その先に何を見ているのだろうか？ たとえばプラットの物語りは、一見すると「私」のアイデンティティを扱っていて、個人の問題に閉じていくように見えるかもしれない。だが、彼女の作品は「私」というテーマを、社会のあり方、共同体のあり方の問題として扱っている。プラットは、この議論の立て方によって、公的なものと私的なものを峻別し、公的な物語りだけを認めてきた近代のあり方を批判している。

このプラットの物語りの先に、モハンティとマーティンは新しい政治共同体の契機を読み取っている。彼女たちによれば、ホームを求めながらそれに一体化しきれずに乖離していく自己を、繰り返しとらえなおしていく過程を語るプラットの物語りは、ホームが「差異を抑圧することによって家族のアイデンティティを保障する」ことを明らかにし、「それ(ホーム)に対する欲望をあきらめさせてくれるものとして」新しい政治共同体の必要を示している、というのである(Mohanty and Martin 2003 [1986], p. 99)。

ジェンダーから議論を起すスコットも、新しい政治共同体のあり方を模索している。彼女はラカンを引用しながら、自己は表象や他者なしにはいられない、自己充足はこの自己と他者の境界を溶解してしまうことになるから、自己は充足されないことが必要だ、と論じる。スコットはそこから「共同体とは共通性を条件としてではなく、差異への依存性によって逆説的に結ばれた個人の集合」と考えるべきではないか、と差異によって結ばれる新しい政治共同体のあり方を探っていく(スコット 1999, 二六二―二七頁)。

マイノリティの歴史学が向かう先には、このような異他なる者とのつながり方、異他なる者つつながる共同体のあり方の提示が想定されているように思われる。ポスト・コロニアリズムの議論がめざすところも同じである。ここではホミ・バーバをとりあげよう。バーバは、ハンナ・アレントが構想した、合意にもとづく共同体のエージェントという考え方を批判している。リベラルな国家が生み出す社会的周縁性の問題に対して、合意を共同体の契機とするこゝでは対応できないからである。これに対して「人間の共同性を……文化的差異と差別との関連において分節しようとする」バーバは、文化的不同意や社会的対立の言説において「修正と書き直しを求めめるエージェンシー」の行為遂行的な過程に関心を向ける(バーバ 2005, 三三二頁)。この過程が、本稿で論じてきたマイノリティの歴史学の実践と符合することは明らかである。

新しい政治共同体のあり方に、移動が重要な論点になることを付言しておこう。移動は、現代世界における問題を先鋭的にあらわす局面である。プラットがテーマ化したホームという概念も、移動との関連においてはじめて意味をもつ。私は別のところで、大都市に住む移民が、重層的なホームの意識を構築していく過程を論じたことがある(森 2005)。移民であるがゆえにホスト社会においてあたりまえのようにマイナーな位置に配置される彼らは、ホスト社会からおしつけられる二者択一のカテゴリを拒絶し、ホームの新しいあり方を模索している。ホームという意識は、移動とともに、新しい政治共同体を構想する重要な契機になりうる。カプランは次のように述べている。「ホームをめぐる問題提起は、なんらかの支配的階層秩序や、ジェンダーという用語のヘゲモニー的用法を脱構築するために利用された場合に、もっとも有益である」(カプラン 2003, 三二八頁、訳語を一部あらためた)。

現代世界は、新たなマイノリティを作り続けていて、マイノリティの歴史／物語りは、つねに語りなおしを要請している。七〇年近く前にベンヤミンが述べたことばが、この文脈でいっそう精彩をはなつ。「歴史的認識の主体は戦う被抑圧者階級自身なのである」(ベンヤミン 1995, 六五七頁)。

参考文献

- Abu-Lughod, Lila 1986 *Veiled Sentiments: Honor and Poetry in a Bedouin Society*, Berkeley & Angeles London, University of California Press.
- 1990 “The romance of resistance: tracing transformations of power through Bedouin women”, *American Ethnologist*, 17(1), pp. 41-55.
- 1991 “Writing against culture”, in Richard G. Fox, ed., *Recapturing Anthropology: Working in the Present*, Santa Fe, New Mexico: School of American Research Press, pp. 137-162.
- 1991 “Writing against culture”, in Richard G. Fox, ed., *Recapturing Anthropology: Working in the Present*, Santa Fe, New Mexico: School of American Research Press, pp. 137-162.
- ペンヤミン、ヴァルター 1995 「歴史の概念について(歴史哲学者たち)」、『ペンヤミン・コレクション』(浅井健二郎編訳、久保哲司訳)ぎくま学芸文庫、六四三—六六五頁
- バーバ、ホッ・K 2005 『文化の場所——ポストコロニアル리즘の位相』(本橋哲也ほか訳)法政大学出版社
- Carrier, James 1992 “Occidentalism: The World Turned Upside Down”, *American Ethnologist*, 19(2), pp. 195-212.
- クリフォード、ジェイムズ 2003[1980] 「オリエンタリズム」について、『文化の窮状——二十世紀の民族誌』(太田好信ほか訳)人文書院、三二—三四八頁
- 2003[1983] 「民族誌的権威について」同書、三五—七四頁
- ドゥルーズ、ジル／ガタリ、フェリックス 1987 「マイナー文学とは何か」『カフカ——マイナー文学のために』(宇波彰・岩田行一訳)法政大学出版社、二七一—五二頁
- フーコー、ミシェル／ドゥルーズ、ジル 1973 「知識人と権力」『現代思想』三月号、四二—五二頁
- フジタニ、タカシ 1999 「オリエンタリズム批判としての民衆史と安丸良夫」、安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』平凡社ライブラリー版、四六九—四八九頁
- Kaplan, Caren 1987 “Deterritorializations: The Rewriting of Home and Exile in Western Feminist Discourse”, *Cultural Critique*, 6, pp. 187-198.
- カプラン、カレン 2003 『移動の時代——旅からディアスポラへ』(村山淳彦訳)未來社
- Mohanty, Chandra Talpade 2003[1991] “Cartographies of Struggle: Third World Women and the Politics of Femi-

nism”, *Feminism without Borders: Decolonizing Theory, Practicing Solidarity*, Durham & London, Duke University Press, pp. 43-84.

Mohanty, Chandra Talpade and Martin, Biddy 2003[1986] “What’s Home Got to Do with It?”, *Feminism without Borders: Decolonizing Theory, Practicing Solidarity*, op. cit., pp. 85-105.

Pratt, Minnie Bruce 1984 “Identity: Skin Blood Heart”, Bulkin, Eily, Pratt, Minnie Bruce and Smith, Barbara, *Yours in Struggle: Three Feminist Perspectives on Anti-Semitism and Racism*, New York, Long Haul Press, pp. 9-63.

サイード、エドワード 1998 『文化と帝国主義 1』(大橋洋一訳)みすず書房
—— 『文化と帝国主義 2』(大橋洋一訳)みすず書房

スコット、ジョン・W 1992 『ジェンダーと歴史学』(荻野美穂訳)平凡社

—— 1999 「ジェンダー再考」(荻野美穂訳)、『思想』四月号、五一-三四頁

スピヴァク、ガヤトリ・C 1998 『サバルタンは語る(と)ができるか』(上村忠男訳)みすず書房
—— 2003 『ポストコロニアル理性批判——消え去りゆく現在の歴史のために』(上村忠男・本橋哲也訳)月曜社

太田好信 1998 「オリエンタリズム批判と文化人類学」『トランスポジションの思想』世界思想社、九五-一四二頁

鹿島徹 2003 「物語り論的歴史理解の可能性のために」『思想』一〇月号、六一-三六頁

春日直樹 2001 『太平洋のラスプーチン——ヴィチ・カンパニ運動の歴史人類学』世界思想社

野家啓一 2003 「物語り行為による世界制作」『思想』一〇月号、五四-七二頁

森明子 2005 「大都市と移民——ベルリンにおける(外国人)カテゴリーと(多文化)意識」『国立民族学博物館研究報告』三〇
巻二号、一四五-二二九頁

安丸良夫 2004 「表象と意味の歴史学」『現代日本思想論』岩波書店、一三一-一五三頁